

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

及川 高

【所属】(助成決定時)

法政大学 沖縄文化研究所

【研究題目】

近代奄美群島における沖縄系生活文化の北上に関する調査研究  
—儀礼食をめぐる文化を中心に—

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は近代奄美群島(鹿児島県南の離島部)において、沖縄系住民の移住(北上)がもたらした文化的インパクトの一端を、主に食文化に焦点を合わせて明らかにすることにある。食生活として具体的に対象化するのには、民俗学的な意味での「ハレ」の日に供される儀礼食である。これら儀礼食はしばしば象徴的な意味が付与されるのみならず、ハレの日であるが故の清浄性・祝祭性が求められ、宗教的感受性を含む民衆意識が反映されている。くわえて儀礼食には、日常食にするには経済的・時間的コストの高いものが多く用いられることから、その研究は近代化過程における生活変化を受けた民衆意識・感覚の変容を明らかにすることに繋がってくる。以上の問題意識に従い、本研究は現地調査に基づいて、沖縄系の食文化が奄美の儀礼食にもたらした変化や影響関係の調査研究を試みるものである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

奄美市及び龍郷町を中心に、現地でのフィールドワークに基づく聞き取りを方法とした。調査に際しては主に先祖祭と盆行事を対象に想定し、儀礼に供する食品の内容や入手経路などについてインタビューを行った。またそうした調査に平行して、生活文化の変遷が分かる民間資料を搜索し、一部を許可を得て複写した。

本研究が注目したのは酒類と豚肉食である。酒は儀礼の場に欠かせないものであるが、近代には自家醸造が罰せられたことから、金銭購入を強いられたことが知られている。奄美における醸造業者は沖縄系住民の関与が大だったことが分かっており、酒の「購入」が始まったことによる嗜好の変化や儀礼の場における意味づけの変化を探った。その結果、酒に関しては沖縄系醸造業者の北上以上の画期として、米軍統治下(1945~1953)の物流の断絶と窮乏があったことが明らかになった。これにより酒の入手が困難になったため奄美では自家醸造が横行したが、これは様々な配慮により1950年頃まで条件付きで認可され、この間に今日では特産品となった焼酎の技術と食味が確立した。その後自家醸造は再び禁止されるが、その時点で流通する酒類は自家醸造から展開したものだだったため食味には連続性があり、儀礼の場での利用にも違和感を生じなかった。

もう一つ注目した豚肉食は奄美のハレの食文化を代表するものであるが、これは元々各世帯で飼育し

ており、その屠畜と諸々の儀礼との関係を探った。その結果、各世帯での豚飼いと屠畜は昭和 40 年代前半まで行われており、その後生活構造の変化によって急速に廃れたことがわかった。またこの屠畜は本来的には年末の恒例行事であり、年始に備えて行われていたことも判明した。その一方、豚飼育の主目的は食用ではなく残飯処理であったといい、平常時の豚肉食は早くから購入に頼る傾向があったことも分かった。先祖祭などで食べる豚肉も購入に頼る場合がしばしばあったが、逆に「正月に向けて自分の家の豚をつぶすこと」は特別で、比較的後年まで継承されていたことが明らかになった。

#### 【結論・考察】（400字程度）

外来の業者や入手経路に対し、奄美の食文化が所期の想定以上の自律性を有していたことが分かった。少なくとも今回の調査・研究の限り、購入による食糧品の入手が一般化するのには昭和 40 年代以降のことである。沖縄系の業者は移住の同時代に即座に影響をもたらしたわけではなく、半世紀程度の期間をかけて食文化に組み込まれていったと目される。なお話題の性質上、それを明示する話は得られなかったものの、戦後の物資の窮乏状況下で即座に自家醸造が始められていることから、醸造技術は近代以降も密かに継承されていたことが推察される。この事実は戦後における行事や儀礼の実態を考える上で重要である。ちなみに市場経済の浸透に関しては、昭和 40 年代に子女の教育費をきっかけに現金収入の必要性が高まり、その副次的展開として市場を利用する習慣が常態化していったようである。この点は日本社会の生活構造の動態の一端を示すものといえ、今後より詳細な研究を進めていく必要がある。